

# テーマ『同和保育実践を考える』

常磐会短期大学 教授 卜田 真一郎さん

人権保育専門講座8は、連続講座です。家庭支援推進保育士の方を中心に、専門性を高めたい保育関係者の方々を対象に、開催しています。

4回開催するこの連続講座のうち、3回目まではそれぞれに個別のテーマを取りあげ、「共有」「交流」「発信」という3つのステップで段階的に学ぶを深める形で研修をすすめています。

ステップ1 各現場で抱えている課題を『共有』する。

ステップ2 お互いの取組を『交流』する。

ステップ3 人権保育推進のため、誰に対して、何を、どのように『発信』するのかを考える。

連続講座第2回目の今回は、「同和保育実践を考える」がテーマでした。

前回（第1回）「部落問題と家庭支援」では、部落問題に起因する子どもを取り巻く課題を共有し、保護者支援の在り方について考えました。今回は、第1回のテーマを深めることを目的に、部落問題と保育実践・保護者との協働について考えました。グループワークでは、保育現場での課題と実践の共有や今後の取組についての意見交流を行いました。

ゲストスピーカーに、豊中市子ども未来部の寺田和子さんをお招きし、「人権保育・保護者との連携・職員集団づくり」と題してお話いただきました。



## 1. 卜田さんのお話より（「同和保育実践」について）

日本における人権保育のあゆみは、部落問題の解決をめざす取組を源流としています。

同和保育がはじめられた当時、部落問題の課題は「子どもたちが差別に出遭うこと」と「経済的・家庭的な生活環境が厳しいこと」でした。この課題を解決するために、国は施策として同和対策の特別措置をすすめ、保育現場では、学力の保障や集団づくりなどに取り組んできました。

取組がすすめられたこともあって、差別意識や生活環境がかつての状況から改善されてきたなか、2002年に特別措置法の期限が切れました。それ以降、保育現場では、部落問題の認識がしっかりと共通理解されていない状況があるように思います。このことは保育現場に限った話ではなく、学校現場でも同様で、調査によると部落問題学習の取組が後退している状況があります。私の勤め先でも、実際に部落問題について知らなかった、学んでこなかったという学生がいます。

部落差別の問題は解消していません。根強く残る偏見の実態は各地の実態調査によって明らかになっています。また、この問題は貧困問題と深く関連していることも指摘されています。部落問題が保育・教育において重要な課題であることは、現在も変わっていないのです。

私たちは、部落問題の現状をどのように捉え、子どもたちにどのような力を育まなければならないのか、改めて考えなければなりません。



では、同和保育実践が大切にしてきたことについて確認したいと思います。  
「同和保育実践がめざしてきたこと」を挙げてみましょう。

## 同和保育実践の「4つの指標」と「6つの原則」

### 4つの指標

- ・ 差別を跳ね返すことのできる健康でしなやかなからだの育成
- ・ 正しい規律と組織性を身につける基本的生活習慣の育成
- ・ 差別を見抜き解放の展望を創造しうる高い知的能力の育成
- ・ 解放の思想を支える豊かな感性の育成

### 6つの原則

- ・ 部落差別の現実から深く学ぶ原則
- ・ 自然成長論克服の原則
- ・ 能力主義克服の原則
- ・ 集団主義保育の確立の原則
- ・ 生活と労働と保育の結合の原則

保育士の世代交代がすすみ、部落問題に対する課題意識が薄まっていく状況があるなかで、この同和保育実践の4つの指標と6つの原則が、特に若い世代に伝わっていないように思います。そこで、この指標・原則は、具体的にどうすすめればよいか、みなさんと考えたいと思います。ここからは、大阪で実践を積まれてこられた寺田和子さんをゲストスピーカーとしてお招きしたので、寺田さんが取り組まれてきたことについてのお話を聴きましょう。話を聴くにあたって、次の課題を念頭においておいてください。

○保育活動をとおしてどのような力を育むのか？

○保護者集団をどのように形成するのか？

○保育者と保護者はどのような協働をすすめることができるのか？

この課題が、同和保育実践をすすめるうえで大変重要であるということを、みなさんと確かめたいと思います。



## 2. 寺田和子さんのお話から

テーマ 人権保育・保護者との連携・職員集団づくり

### (1)「同和保育所」の保育目標

昨年まで、豊中市にある「同和保育所」に勤めていました。その保育所がある地域には人権まちづくりの協議会があって、地域の人たちの声を間近に聴くことができます。私が勤めていた園は、地域の保護者たちの願いによって設立されたものです。私はそこで同和保育と出会い、自分もその実践に努めてきました。

同和保育でめざしてきたことは、園の保育目標としてまとめられ、私たちはそれを受け継いできました。その保育目標とは次のようなものです。

- ・「0歳から自分を大切にできる力」
- ・「人とかがかわることが好きで、人を大切にできる力」
- ・「おかしいことがあったら『おかしいやん』と言える力」



これらを仲間といっしょに育む

ただし、具体的な取組内容は目の前の「その子」によって異なるものであるということを忘れてはいけません。



### (2)差別発言の衝撃

ある時、地域の保護者どうしの会話のなかで差別発言がありました。そのことが私のところに伝わってきました。聞いてみると、その場には赤ちゃんや子どももいたということでした。私はそれを聞いて「子どもたちはこんな差別のなかを生きていかなければならないのか」と思い、悔しい気持ちでいっぱいになりました。

この出来事を園で共有すると、「なんでこんなことあるん!」「今もまだあるんか……」など様々な反応が職員からありました。そして、「明日からの保育をどうするか」を職員みんなで話し合いました。話し合っているうちに、「絶対に許さへん!」「子どもたちがいつか差別に遭うかもしれないと思うと悔しい」という気持ちが高まってきて職員集団がひとつになっていくのを感じました。

私たちは、この差別発言をきっかけに、自分たちの保育実践を検証し直しました。

#### ①園の目標の意味を捉えなおす（部落問題について改めて学ぶ）

差別発言があったことを園の保護者と共有し、話し合ったときのことです。ある保護者から保育に関する不満を突きつけられました。

**「今の園がどんな保育をめざそうとしているのか、自分たちには全くみえてこない。以前は園がめざしている目標というのが子どもたちの姿から保護者にも伝わっていたのに」**

私たちにとって、この言葉はとても衝撃的でした。「園の保育目標が部落差別をなくす取組とつながっているということを職員は理解しているのか?」と突きつけられたからです。

実際に、職員のなかには「部落差別をなくすための保育って具体的にどのようにすすめればいいのかかわからない」という者もいました。私は「私たちの園の保育目標がまさにそれでしょ」と返したのですが、その職員は「園の目標と部落差別をなくすことと、どのようにつながっているのか本当は理解できていない」と打ち明けました。私たちは、園の保育目標がどのような経緯で

設定されてきたのかきちんと伝えていなかったんだな、と反省しました。

## 職員と取り組んだこと

### ・地域の部落問題について学ぶ

職員を人権まちづくりセンターの資料室に誘い、いっしょに部落問題についての研修を行いました。「わからない」と言った職員だけでなく、他の職員も参加しました。「すぐ近くにある施設なのに行ったことがなかった」「自分たちの地域の歴史を知らなかった」などという声がありました。職員は、近代から現代にかけての部落差別に抗ってきた地域の歴史や園の設立の経緯などを研修しました。

### ・園の保育目標と部落差別をなくすために必要な力のつながり確かめる

地域の人たちから、改めて子どもたちに対してどのようなことを願い、差別に対してどれほどの怒りを抱えていたのかを聴かせてもらいました。私たちは、地域の人たちの思いや願いから、部落差別を乗り越えるためには、「自分を大切にできる力」や「『おかしいやん』と言える力」が必要であるということを知り、自分たちの園が受け継いできた園の保育目標の意義を再確認しました。

## ②保護者とのかかわりをふり返る

**「昔は、保育を守る会とかがあったけど、最近は親どうしがつながってない。まわりの親がどんな思いで子育てをしようとしているかわからない。語り合える親がいないから悩みやしんどさを共有できない」**

これはある保護者から出された意見です。

私はこの言葉を職員研修で取りあげました。そして、「『保護者集団づくり』ってどう取り組めばよいか?」「『保護者集団づくり』をすすめることと部落差別をなくす取組はどう関係しているか?」というテーマをたてて職員どうしで話し合いました。

私はそのとき、「みんな、どんな保護者が気になっている?」と職員に尋ねました。職員からは「心の病気がある保護者」とか「子育てがわからず孤立している保護者」などの意見が次々と出てきました。そうやって出し合ううちに、「しんどい思いをしている保護者って私たちの近くにこんなにもたくさんいるんだ」と職員は理解していきました。同時に、このようなしんどさを抱えている保護者とつながることが保育士の役割なのだと確認できたようでした。

そこで私は、「では、その保護者たちとどのようにかかわっているか?」とさらに尋ねました。職員たちは改めて自分たちの毎日をふり返り、「自分たちとしては気をつけて保護者と話をしているつもりでもあの親とはいつからか話をしていないな、そういえば顔もみてないぞ」というように、保護者と十分話ができていないことに気づいていきました。

この研修の後、「あらためて保護者とつながろう」という目標を立てる職員があらわれました。その職員は、「最近話をしていない親がいるから、とにかく話すわ」と言っていました。最近会えておらず気になっていた親がいたのです。

## 職員と取り組んだこと

### ・会えていない親ととにかく会って話をする

気にかけていても迎えの時間の関係で会えない状態が続いた親には、その親が迎えに来る時間まで待って話しかけるようにしました。直接話をしてみると、把握していない家庭状況や子どものことについて新たな気づきがたくさんありました。そうして、まずは親と

担任との信頼関係づくりに努めました。

- ・ **機会を捉えて、保護者どうしが知り合うよう働きかける**

キャンプのときに、しんどさを抱えている保護者や子育てがわからずにパニックになる傾向がある保護者にあえてリーダーになってもらい、他の保護者と交流する機会を意図的に設定しました。

- ・ **保育活動のねらいを保護者と共有する**

運動会をする前に、ある担任は『『どうせ自分なんて』と考えるやる気をみせない子にがんばる気もちをもたせたい』と保護者集団と共有しました。すると、保護者は独自に子どもたちを元気づけるための応援団を編成しました。園の考えていることを、何とかサポートしたいという保護者による主体的な行動でした。

### ③保護者と協働して保育活動をすすめる

5歳児のクラスには支援が必要な家庭に暮らす子どもたちがたくさんいました。その子どもたちは、他の子に対してきつく当たる姿がみられたり、みんなと同じ行動がとれなかったりする様子がみられました。

そのクラスの担任は、どのような保育をすればいいのかと悩んでいました。私は、「今、どう対処するかを考えるのではなくて、将来に向けてどんな力をつけさせたいの？」と声をかけました。すると、その担任は「この子たちに、自分のことを大切にできる力を育みたい」と答えました。そこで、その子たちの自尊感情を育むために、とにかく褒めようということになり、園の職員みんなでその子たちに声をかけていくことにしました。取り組むにあたって、私は『〇〇さん、すごいね』と伝えるだけではその子の自尊感情にはつながらないよ』と教えました。するとその担任は「たくさんの人たちに協力してもらおう」と、これまでの取組で培った保護者とのつながりを活かして、保護者を巻き込みながらの取組をすすめました。

#### **職員と取り組んだこと**

- ・ **とにかくその子のことをまるごと受けとめる**

単に甘やかすのではなく、その子はその時にどのようなことを感じているのかをつかみ、共感することが大切です。「この子たちは厳しい家庭環境のなかで育っているんだ」というように、行動の背景にあるものをみようとすると姿勢が大切だと思います。そのためにも、保護者とよく話をして生活背景をつかむ必要があります。

- ・ **できるだけたくさんの人から、その子のよさを伝える**

あそびや保育活動のなかで、子どもたちは「いいな」という姿をたびたびみせます。その瞬間をみのがさず、その子の「いいな」と思った場面を紙に書いて廊下に飾るようにしました。担任だけではなく全職員で取り組みました。

誕生日の子にメッセージカードを渡すのですが、迎えに来た他の保護者にも頼んでメッセージを書いてもらいました。最終的にほとんどの保護者からのメッセージが寄せられ、たくさんのカードを子どもたちに届けることができました。

- ・ **保育参観の際に、園のめざす保育目標や保育内容について保護者と話し合う**

保護者会で、「イヤだ」と思っていることを「イヤだ」とはっきり言うことの大切さを子どもたちに伝えたいという園の意図を保護者と共有しました。するとある保護者は、「それって部落差別をなくすために必要なことやで。先生がやっとなることは、差別をなくそうとすることやで」と教えてくれました。保護者と気もちがひとつになったと実感しました。



自分たちの保育活動を振り返ると、「保護者を抜きにしたんちゃうかな」と気づくことがあります。私たちの園では、保護者のしんどさに気づけるよう積極的にかかわっていきこうと職員たちと確認しました。

話をしたり協働したりする機会をつくることで、職員はいろいろなことに気づき変容していきます。それが保育活動にも反映されるんですね。そうしたなかで、子どもたちもおのずと成長していくものです。

### 3. 「同和保育実践」にかかわる課題を共有しよう

今、各現場において一人ひとりの参加者が抱えている同和保育実践に関わる課題、また本日の寺田さんのお話から気づかれたことについて、ブレーストーミングの手法を用いながら共有しました。



#### 【グループワークでの交流から】

##### ○部落問題と向き合っているか

- 差別問題に対して、積極的になれていないと思います。まずどのような取組からはじめればよいのでしょうか……。
- 同和地区内に園があるのですが、地区であることをどれくらいの保護者が知っているのかつかめていません。わからないので、踏み込んだ話ができていません。
- 地区の親と部落問題について話をしました。すると、「差別はされた経験がないし、もう差別はないんちゃう？」と言われました。子どものことを思うともっと話し合いたいのですが……。
- 保護者懇談会を開きますが、子育てについてのテーマだと多く参加するのに、部落問題について考える回だと参加が少なくなる傾向があります。
- 自分たちが取り組んでいる保育が、部落差別をなくすことにどのようにつながっているのか、自分も含めて十分理解できていない。私たち保育士自身が、部落差別をなくす主体者であるという意識をもっているかというところに課題を感じています。

##### ○子どもの姿からどのような課題を捉えているか

- 「どうせ私なんか……」と言う子どももいます。自尊感情を高めなければなりません。
- 「乱暴な言葉をつかう子」「すぐ手が出る子」などが、クラスのなかでマイナスイメージをもたれています。保護者からもそうみられがちです。



- ・「それはイヤだ」「もっとこうしてほしい」といった思いをはっきり言えない子どもが多いと思います。周りの子に直接言わず、保育士にだけ思いを伝えに来ることが続いています。
- ・すぐにあきらめてしまったり、投げやりになったりする子どもがいます。そのような子どもお保護者に気になる言動がみられ、どのように話をしていけばよいか考えています。
- ・家庭環境が子どもの姿に大きく影響しています。言葉づかい、生活リズムなどです。
- ・子ども時代に親からの愛情を十分受けてこなかったと思われる保護者がいるのですが、そうした保護者の子どもには、不安感や弱さがみられています。

### ○保護者とつながれているのか

- ・仕事に追われ、子育てに関心の薄い家庭がみられます。そうした家庭との関係づくりが難しいです。
- ・金銭的な問題や生活態度の乱れが子どもの育ちや子育てにあらわれています。
- ・保護者とじっくり話す時間がなかなかつくっていません。親子遠足や保育参加のときぐらいしか保護者とじっくり話をする機会がありません。
- ・母親との関わりに偏り、父親との関わりが少ない状況です。
- ・じっくり話をするすることで、保護者の思いやしんどさに気づくことができます。日々のなかで機会をみつけて、声をかけることが大切だと思います。

### ○保護者どうしをつなぐ取組をすすめているのか

- ・懇談会、講演会への参加がいつも決まった方になってしまいます。「来てほしい」という方に来てもらえていません。
- ・保育参観や保護者学習会への参加率が低いです。保護者とともに考え合う機会をどのように持っていくべきでしょうか。
- ・保護者どうしで話し合う場をつくっても会話が続きません。
- ・親の思いを聞くことがあります。しかし、それを他の保護者に理解してもらうための取組ができていません。
- ・子どもの誕生日メッセージカードを、その子の保護者だけでなく、クラスの他の保護者に書いてもらうことに取り組みたいと思いました。“大切にされている”ことを実感させたいです。

### ○課題を共有できる職員集団となっているのか

- ・保育士がお互いにどんな思いで保育を行っているのか、なかなか共有する機会がもてていません。
- ・保育内容について話し合う場面もありますが、それぞれの困り感ばかり出てしまい、取組内容などの具体的な手立てについてじっくり話し合えていません。
- ・さまざまな子どもや保護者にどう対応すればいいのか悩んでいる新人保育士がいます。その保育士と何でも相談できる信頼関係を築く必要があります。
- ・「自分はこんなねらいをもって保育をしている」と、もっと周囲に伝えたいです。



### ○家庭支援推進保育士としての役割について

- ・家庭支援推進保育士としての役割について実践できているのか迷い悩んでいます。先日

も担任ができていないところをフォローできませんでした。

- 家庭支援推進保育士となりましたが、何一つ実践できていないと感じています。どのような役割があるのか理解できていないように思っています。
- 自分たちが日々保育の中で大事にしていることが、差別をなくすことにつながっているのか振り返らなければなりません。



## 【卜田さんのコメント】

課題を交流しながら、それぞれどのような実践をしているのか交流できていたようですね。教室でみられる子どもの課題は、その子の生活背景や地域の課題が大きくかかわっていることが共有できたように見受けられました。

寺田さんの実践からは、保護者とつながることが保育をすすめるうえで極めて重要であるということが提起されました。しかし、保護者が抱えさせられている課題には、社会問題が影響している場合がある点も忘れてはなりません。社会問題を含めて課題意識をもって、園としてどのような取組をすすめるとよいのかを考えなければなりません。

例えば、外国人住民にかかわっては、社会的に厳しい状況がふりかかっています。大阪にある外国人住民が多く暮らしている地域の学校では、個々の家庭に関わるだけでは支えきれないということで、市民活動と協働して子どもたちに放課後の居場所をつくったり、地域ぐるみで保護者支援をすすめたりしています。

経済的に厳しい家庭が多い地域でも、地域ぐるみで「こども食堂」や「こどものさと」などの取組が行われています。

このように、社会問題に目を向ける必要が、今、すべての保育園（所）に生じています。家庭支援推進保育士は、そうした視点を園に共有する役割も担っているのだと思います。



## 4. 部落問題と保護者支援にかかわる次の一步を考えよう！

### ～未来への種まきワーク～

一人ひとりが「発信（次の一步）」としてやってみようと思うことを考え、人権保育推進のための『種』をまきました。具体的には一人ひとりが付箋に自分のできることを書きました。全員で輪になり、その小さな『種』（できることを書いた付箋）を『畑』（模造紙）に貼って（種まき）いきました。

#### 【もっと保護者とかかわろう！】

- 一日10人は保護者と話す！何でもいいから話す時間を増やす！
- 保護者の思いにもう少し耳を傾けて、暮らしや子育て、願いを聞くことから始めよう。
- やっぱり保護者としっかり向きあうこと！保護者が安定したら子どもも安定する。
- 子どものことや、どんな思いで保育をしているかを保護者にしっかり伝えていきたい！
- 保護者とのつながりを強めると共に、保護者どうしつなげる機会をつくる！
- 保護者どうしがつながれるように間に入る。ちょっとした言葉がけが重要。
- 保護者の“支援”や“援助”でなく、「共に考えていく」ということを意識していきたい。
- 保育士の思いと具体的ななしかけがあれば、子どもも保護者も変えられるはず。その自覚をもって実践していく！

#### 【よりよい人権保育をすすめよう！】

- 子どもの姿をしっかり見ること。子どもの背景を考えること。
- まず自分自身が知識を備える。
- 被差別部落が園の地域にないからといって部落問題について取り組まないのはいけない。子どもたちは成長するなかで、問題と出会うはず。そのとき「おかしいやん」と発信できる子どもに育てってほしい。その目標のもとで保育活動をすすめる！
- 部落問題と保育とのつながりを意識する。部落問題から学ぶことがなぜ大切か、もう一度考える。
- 地域に出向き、差別の現実を目を向けていきたい。
- 親も子も、人と出会えてあたたかいなと思えるよう、一人じゃないと実感できるつながりを保育園で一人でも多くつくっていきたい。
- 自分の役割をもう一度ふり返り、“やっているつもり”になっていないようにしたい。

#### 【職員集団をつくろう！】

- 職員が同じ思いで保育できるよう、職員間の連携が大切！

- ・保育園で保護者、職員が一緒になって部落問題について考えていく研修を行う。
- ・子どもにつけたい力（育てたい力）を職員どうしでしっかり話したい。
- ・まず自分自身が学ぶことを大事にするとともに、周囲の先生との対話を大事にする。



## 参加者のアンケートより

- ・同和保育の実践を具体的にお話ししていただき、とても参考になりました。同時に、今まで自分なりにはがんばって取り組んできたつもりでいましたが、まだまだ甘さを感じました。もっと自分をふり返ってがんばりたいです。
- ・今日の研修で、「保護者どうしのつながりをつくるのが、子どもの育ちにとって大切なのだ」と感じました。地域の課題を踏まえて、保護者どうしをつなげる取組を考えていきたいと思えます。
- ・保護者の思い（悩みやしんどさ）を聞けるように、日々話す機会をもって関係を築いていくことが大切なのだと思えて感じました。子どもの姿から「つけたい力」を明確にして、保護者と関わりながら、保育活動をすすめていきたいです。
- ・自分の保育のねらいや取り組もうとしていることを、自信をもって伝えることができていなかったなと気づかされました。自分をふり返る良い機会になりました。
- ・子どもの姿や課題を書き出すと、職員どうしで共有できるし、自分のなかに決めつけがあることに気づくこともできるのだと思いました。
- ・自分にできることとして、できるだけ保護者と話をしてきたつもりでしたが、部落問題のことを話し合っていると、深い部分での話はできていなかったな、「このことを話したい」という意思がもてていなかったなと気づかされました。でも関係をつくっていくために前にすすみたいと思いました。